

令和7年度

「運営に関する計画」

最終評価

大阪市立小松小学校

令和8年2月

1 学校運営の中期目標

**現状と課題**

**安全・安心な教育の推進の視点**

- いじめについて：いじめに対する意識は、「いじめはいけないことだ」との高い意識が育っている。一方、「わからない」「そう(悪いこと)思わない」との回答もあり、人権問題として教員も捉えて「絶対に許されない」という丁寧な指導の必要がある。今年度も継続して「いじめ」のない、また発生した「いじめ」に対し教職員全体で確固たる対応を行い、児童の不安感を確実に払拭する安全安心な学校を目指していく。
- きまりについて：日常生活の中で、自分の気持ちを優先してルールが意識できていない場面が多くある。また、きまりを詳しく理解していない児童がいる現状がある。学校のきまりの項目を見直し、きまり自体を児童にわかりやすいものにしていくとともに、ポジティブ行動支援の観点から(学校の・社会の)決まりやルールを守る意識の改善を図っていく。
- あいさつについて：コミュニケーションや人間関係の基本となるあいさつについては、目標達成に昨年度大きく寄与した取り組みを継続し、子どもたちがより意欲的にあいさつを交わす環境を整備していく。

**未来を切り拓く学力・体力の向上の視点**

- 学力について：昨年度は基礎学力の定着に課題が残った。また、昨年度まで「考えを深める」「伝え合う」「解決に向かって学び合う」授業づくりを推進してきたが、依然として児童によっては課題への主体的な関わりが弱く、「わからないからやらない」「失敗が不安で発言しない」といった姿も見られる。基礎学力の定着の面でも「主体的な学び」が大きく寄与することから、本年度研究活動の見直しを行い、研究主題「PBSの視点を授業に取り入れていく」という方針のもと、児童のポジティブな行動を認め合い、安心して学びに向かえる教室づくりを全教職員で目指す。各教科等の授業において、児童の「学びに向かう力」を育てる視点を明確に位置づけ、日々の実践の中で育てていく。
- 運動・体力について：大阪市の平均と比べて、体力面全般で目標を大きく下回り課題が残った。子どもたちが自主的に運動に向かうための施策や工夫においてもポジティブ行動支援を織り込み、昨年度までの取り組みから視点を変えた新しい取り組みを模索しながら体力向上に取り組んでいく。

**学びを支える教育環境の充実の視点**

- 学習者用端末の活用について：学習者用端末の使用状況は市内でも上位にある。今年度も次世代社会を生きていく子どもたちに、スキルとモラルを必要不可欠な両輪と考え、その定着を図っていく。また、学習者用端末の利用効果も検証していきたい。
- 働き方改革について：「学校園における働き方改革推進プラン」の着実な実施として、教職員の勤務時間の適正化を目指す。授業時数や校時の見直しも含め業務時間内での効果的で効率的な時間の使い方の改革を進めていく。
- 読書について：昨年度刷新した読書週間などの取り組みが奏功し大幅な改善が図れており今年度も継続し、本と向き合う時間を確保して本を読む楽しさや有用性の意識を高めていく。

## 中期目標

### 【安全・安心な教育の推進】

- 小学校学力経年調査における「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」に対して、最も肯定的な「そう思う」と回答する児童の割合を85%以上にする。
- 小学校学力経年調査における「学校のきまりを守っていますか」に対して、肯定的に回答する児童の割合を90%以上にする。
- 年度末の学校評価アンケートにおいて、「気持ちの良いあいさつができる」の項目について肯定的な回答をする児童の割合を80%以上にする。

### 【未来を切り拓く学力・体力の向上】

- 小学校学力経年調査における「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」に対して、最も肯定的な「当てはまる」と回答する児童の割合を35%以上にする。
- 全国体力・運動能力、運動習慣等調査における体力合計点の対全国比を男女ともに前年度より0.3ポイント向上させる。
- 全国体力・運動能力、運動習慣調査における反復横とびの平均の記録を、大阪市平均以上にする。

### 【学びを支える教育環境の充実】

- 授業日において、児童の8割以上が学習者用端末を活用した日数が、年間授業日の50%以上にする。〔ただし、事務局が定める学校行事等ICT活用が適さない日数を除く〕
- 年次有給休暇を10日以上取得する教職員の割合を85%以上にする。
- 学校アンケートにおける「本を読むのは楽しいと思いますか。(新聞を含む)」で肯定的な回答をする児童の割合を75%以上にする。

## 2 中期目標の達成に向けた年度目標

### 【安全・安心な教育の推進】

- 小学校学力経年調査における「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」に対して、最も肯定的な「そう思う」と回答する児童の割合を83%以上にする。
- 小学校学力経年調査または校内アンケートにおける「学校のきまりを守っていますか」に対して、肯定的に回答する児童の割合を92%以上にする。
- 年度末の学校評価アンケートにおいて、「笑顔であいさつをしよう」の項目について肯定的な回答をする児童の割合を78%以上にする。

### 【未来を切り拓く学力・体力の向上】

- 小学校学力経年調査における「授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいますか。」という質問に対して、最も肯定的な「当てはまる」と回答する児童の割合を44%にする。
- 小学校学力経年調査における「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」に対して、最も肯定的な「当てはまる」と回答する児童の割合を38%以上にする。
- 全国体力・運動能力、運動習慣等調査における体力合計点の対全国比を男女ともに前年度より0.1ポイント向上させる。
- 全国体力・運動能力調査における反復横とびの平均記録を大阪市平均と同程度にすることを目標とし、全学年でも1学期と3学期に反復横跳びの記録を測定し、1学期より向上した児童の割合を60%以上にする。

### 【学びを支える教育環境の充実】

- 授業日において、児童の8割以上が学習者用端末を活用した日数が、年間授業日の93%以上にする。[ただし、事務局が定める学校行事等ICT活用が適さない日数を除く]
- 「学校園における働き方改革推進プラン」に掲げる教員の勤務時間に関する基準1を満たす教員の割合を前年度以上にする。
  - ・1か月の時間外勤務時間が45時間を超えないようにすること
  - ・1年間の時間外勤務時間が360時間を超えないようにすること
- 学校アンケートにおける「本を読むのは楽しいと思いますか。新聞を含む)」で肯定的な回答をする児童の割合を75%以上にする。

### 3 本年度の自己評価結果の総括

【安心・安全な教育の推進】【未来を切り拓く学力・体力の向上】【学びを支える教育環境の充実】の3つの視点に基づく、中期目標及び年度目標については概ね達成できた。しかし、新たに課題が見つかったもの、わずかながら目標値に達していないものもあり、来年度以降に向けて課題を残す結果となった。

【安心・安全な教育の推進】について、概ね中期目標及び年度目標を達成できた。「いじめを考える日」の校長講話や標語・作文づくり、日常的な指導を通じて、いじめを許さない意識の定着を図った。アンケートの結果は、1～4年生では数値目標（83%以上）を達成し、5年生も肯定的な回答全体では97.4%と高い理解を示した。一方で、6年生は最も肯定的な回答が80.2%に留まり、学級内のトラブル対応など依然として課題が見られた。あいさつ運動やPBSの取組により、2年生（92.2%）や3年生（79.9%）では目標（78%以上）を達成した。「笑顔で」という指標の捉え方の難しさや、取組期間外の意識低下が日常的な定着の課題として浮き彫りになった。

【未来を切り拓く学力・体力の向上】について、概ね中期目標及び年度目標を達成できた。研究主題「『できた！』があふれる教室に」に基づき、児童の前向きな行動を認めるPBSの視点を導入し、安心して学習に参加できる雰囲気が醸成された。一方で、PBSを具体的に活用する場面の深まりについては、学級や授業によって差が見られた。思考力・判断力・表現力の育成では、ノートやICTを用いた多様な表現機会の創出により、主体的に学びに関わろうとする姿が広がった。しかし、他者の考えを踏まえて自分の考えを深める場面では習熟度に差があり、アンケート結果と実際の学習活動の姿の乖離も課題となった。体力の向上では、反復横とびを中心とした系統的な指導や動画活用により体力向上への意識は広まったが、活動量や意欲には個人差があり、日常的な習慣化には至らなかった。

【学びを支える教育環境の充実】について、概ね中期目標及び年度目標を達成できた。端末活用率は高く定着しており、特に低学年での習慣化や高学年での多角的な活用が進んだ。「こころの天気」の運用は、児童の微細な変化を察知し、個別の対話につなげる有効な手段として機能した。読書活動では、朝読書や読み聞かせにより、学校アンケートの肯定的な回答が94.6%に達するなど、児童の読書意欲に好影響を与えた。

本年度の教育活動は概ね当初の目標に沿って進捗したが、意識の定着や日常化の面で学年差が見られるなど、質の向上に向けた課題も残された。次年度は本年度の自己評価結果を運営計画の改善に直結させ、児童の『できた！』という実感を学校全体のさらなる活気に繋げていく。

(様式例2)

大阪市立小松小学校 令和7年度 運営に関する計画・自己評価 (目標別シート)

評価基準 A: 目標を上回って達成した B: 目標どおりに達成した  
C: 取り組んだが目標を達成できなかった D: ほとんど取り組めず目標も達成できなかった

年度目標	達成状況
<p><b>【最重要目標1 安全・安心な教育の推進】</b></p> <p>○小学校学力経年調査における「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」に対して、最も肯定的な「そう思う」と回答する児童の割合を83%以上にする。</p> <p>○小学校学力経年調査または校内アンケートにおける「学校のきまりを守っていますか」に対して、肯定的に回答する児童の割合を92%以上にする。</p> <p>○年度末の学校アンケートにおいて、「笑顔であいさつをしよう」の項目について肯定的な回答をする児童の割合を78%以上にする。</p>	B

年度目標の達成に向けた取組内容、取組の進捗状況を測る指標	進捗状況
<p>取組内容①【基本的な方向1 安全・安心な教育環境の実現】</p> <p>いじめを考える日に放送で校長先生から話を聞くとともに、同週内に学級で一人ひとりが「いじめについて考える」時間を設け、いじめ防止の標語を作る活動や「いのちのつながり(作文)」に取り組む。</p>	B
<p>指標</p> <p>学校アンケートにおいて、「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思いますか」の項目において、最も肯定的な回答を83%以上とする。</p>	
<p>取組内容②【基本的な方向1 安全・安心な教育環境の実現】</p> <p>「学校のきまり」から「学校で期待される姿」に沿った具体的な行動について、日常場面で例示し、それが実行できた際には、具体的なポジティブフィードバック(PF)で称賛する。また、PFの方法を工夫し、児童の主体性を引き出す。</p>	C
<p>指標</p> <p>学校アンケートにおいて、「学校のきまりを守っていると思いますか」の項目において、肯定的な回答を92%以上とする。</p>	
<p>取組内容③【基本的な方向2 豊かな心の育成】</p> <p>年間を通してあいさつ運動に取り組み、がんばりカードなどであいさつの習慣化を推進していく。また、普段からもあいさつの意義を考える指導や実践を行ったり、登校指導で元気なあいさつを称賛したりすることで、あいさつがあふれる学校にしていく。</p>	C
<p>指標</p> <p>学校アンケートの「笑顔であいさつをしよう」の項目において、肯定的な回答をする児童の数を78%以上にする。</p>	
<p>取組内容④【基本的な方向5 健やかな体の育成】</p> <p>計画に基づき、社会科や家庭科、学級活動、給食指導などの時間に食育の指導を実践し、食育の日(毎月19日)に給食時間の月目標に関する資料を活用し、食に関する指導の時間を設ける。</p>	A
<p>指標</p> <p>バランスのよい食生活について考えることができるよう、食に関する指導の時間を2回以上設ける。</p>	

## 年度目標の達成状況や取組結果と分析

- ① 「いじめを考える日」を中心に、校長講話や学級での話し合い、標語づくりや作文活動などを通して、いじめ防止について全校で考える取組を行った。また、日常の学級指導においても、いじめはどのような形であっても許されないことを繰り返し指導してきた。その結果、学校アンケートにおける「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思いますか」の項目では、多くの学年で最も肯定的な回答が目標値である 83%を上回る数値を示し、児童のいじめに対する意識の定着がうかがえる結果となった。学年別では、1～4年生は数値目標を達成した。5年生では、最も肯定的な回答は目標値に届かなかったものの、肯定的な回答全体では 97.4%と高く、「いじめはいけないこと」という理解は十分に広がっていることが確認できた。一方、6年生では最も肯定的な回答が 80.2%と目標値を下回り、学級内でのトラブル時の言動など、引き続き丁寧な指導が必要な課題も明らかとなった。また、特別支援学級においては、日常的に助け合いや思いやりのある関わりが見られ、いじめが生まれにくい環境が形成されている。意見の違いからトラブルが生じた場合でも、話し合いや振り返りを通して気持ちを整理し、学びにつなげる姿が見られた。

以上のことから、いじめ防止に関する取組は全体として一定の成果を上げたと評価できる。一方で、学年差や個々の児童の受け止め方の違いも見られることから、今後も「小さな芽の段階での気づきと対応」を大切にし、日常の指導を通して、いじめを許さない学校風土のさらなる定着を図っていく必要がある。
- ② 本年度は、「学校のきまり」を意識した日常的な声かけや指導を行い、規範意識の向上を図ってきた。その結果、学校アンケートでは目標値である 92%を達成した学年も見られ、特に廊下や階段の歩行など、重点的に取り組んだ行動については改善が見られた。一方で、学年によって肯定的な回答にばらつきがあり、全体としては目標値に達しない学年も多かった。

アンケートでは「守っている」と回答していても、実際の行動場面では、時間を守れない、廊下を走る、持ち物や身だしなみのきまりを守れないなどの課題が依然として見られた。また、注意や指導の受け止め方に個人差があり、きまりを理解していても自分の気持ちを優先して行動してしまう児童の存在も課題として明らかになった。
- ③ 年間を通して、あいさつ運動や児童会主導のあいさつ週間、がんばりカードやPBSの取組を行い、「自分から」「笑顔で」あいさつする習慣化を図ってきた。その結果、2年生では 92.2%、3年生では 79.9%と目標値である 78%を達成するなど、一定の成果が見られた。一方で、1年生(73.6%)、4年生(68.9%)、5年生(64%)では目標値に届かず、全体として学年差が大きい結果となった。特に、「あいさつはできているが、笑顔でとなると難しい」と感じている児童が多く、「笑顔であいさつ」という指標の捉え方に難しさがあることが明らかとなった。

また、あいさつ週間中は意欲的な姿が多く見られる一方で、取組期間外では意識が低下する傾向があり、あいさつが日常的に定着しきれていないという課題も浮き彫りになった。特別支援学級においても、意識的なあいさつは増えているものの、自発的・笑顔でのあいさつは引き続き課題である。
- ④ 年間計画に基づき、全学年・特別支援学級・専科において、食に関する指導を計画的に実施することができた。栄養教諭による授業や家庭科、学級活動、給食指導などを通して、児童はバランスのよい食生活や栄養の大切さについて学ぶ機会を重ねてきた。低学年では、食べ物への関心を高める取組を行い、中・高学年では栄養素や食生活を自分の生活と結びつけて考える学習が進められた。特に高学年では、給食の残食に対する意識が高まり、協力して食べようとする態度が育ってきている。また、給食後のふり返りや感想記入などを取り入れることで、食について考える習慣づくりにもつながった。これらの取組を通して、食に関する指導は全体として概ね目標を達成したと評価できる。

## 次年度への改善点

- ① 本年度の取組により、学校アンケートにおいては多くの学年で高い肯定的評価が得られ、児童のいじめに対する意識の高まりが見られた。しかし、数値が高いことをもって、いじめが完全になくなったとは言えず、学年や学級によってはトラブルや不適切な言動が見られる場面もある。次年度に向けては、「いじめはどんな理由があっても許されない」という価値観を、学校全体でさらに定着させることが課題である。そのために、教職員一人ひとりが毅然とした態度を示し、いじめに対しては決して見過ごさず、早期に対応する姿勢を明確にしていく必要がある。また、学級や学年でいじめについて考える時間を継続的に確保し、児童自身が自分の言動を振り返り、考えを深める機会を設けていくことが重要である。

特に、教師側の「絶対に許さない」という強いメッセージが児童に伝わるよう、指導の一貫性を意識した取組を進めていく。今後も、日常の学級指導を基盤としながら、学校全体でいじめのない環境づくりを継続し、児童が安心して過ごせる学校づくりを目指していく。

- ② 次年度に向けては、きまりの内容を改めて整理し、「学校で期待される姿」を具体的かつ視覚的に示すことで、児童が行動をイメージしやすくすることが必要である。また、重点的に指導するきまりを明確にし、学校全体で統一した指導を行うことが求められる。さらに、教職員間で指導基準や対応の仕方を共通理解し、注意や声かけにばらつきが生じないようにすることが重要である。その上で、守れていない点を指摘するだけでなく、守れている行動を積極的に認め、ポジティブフィードバックを通して定着を図っていく。加えて、きまりを守ることが安全や安心、そして自分自身の利益につながることを体験的に理解できる指導を行い、「守らされるきまり」から「自分のために守るきまり」へと意識を高めていく必要がある。

- ③ 次年度に向けては、あいさつ週間や児童会主体の取組、PBS の活動を継続しつつ、「形としてのあいさつ」から「気持ちを伴ったあいさつ」へと質を高めていく指導が必要である。そのために、
- ・行動目標を教室や校内に掲示し、児童が常に意識できる環境を整えること
  - ・シールや掲示物など、視覚的に達成感を得られる工夫を継続すること
  - ・他学年の取組を共有し、学校全体であいさつ運動を盛り上げることが求められる。

また、「笑顔であいさつ」という表現が児童にとって難しい場合には、「意識してあいさつする」「相手を意識してあいさつする」など、段階的な目標設定も検討し、児童や教職員の頑張りが数値として見える評価の工夫が必要である。加えて、よい行動が見られた際にはその場で即時にポジティブフィードバックを行うことを学校全体で意識し、教員の関わり方についても共通理解を図っていく。特別支援学級を含め、児童一人ひとりが自然と笑顔になり、安心してあいさつできる学校環境づくりを進めていく。

- ④ 次年度に向けては、これまでの計画的な取組を継続しつつ、食育を日常の生活習慣の改善につなげていくことが課題である。低学年では、苦手な食べ物にも挑戦しようとする意欲を育て、中学年では食生活を自分事として考えられるような声かけや指導を続けていく。高学年では、残食の量にとらわれすぎることなく、一人ひとりの努力や工夫を認める視点を大切にしていく。また、朝食の欠食が見られる児童もいることから、家庭と連携しながら、一日三食・バランスのよい食生活の重要性について引き続き指導していく必要がある。

今後も、食育の日や給食指導、教科横断的な学習を通して、児童が健康な生活習慣を主体的に身につけられるよう取り組んでいく。

(様式例 2)

大阪市立小松小学校 令和 7 年度 運営に関する計画・自己評価 (目標別シート)

評価基準 A: 目標を上回って達成した B: 目標どおりに達成した  
C: 取り組んだが目標を達成できなかった D: ほとんど取り組めず目標も達成できなかった

年度目標	進捗状況
<p><b>【最重要目標 2 未来を切り拓く学力・体力の向上】</b></p> <p>○小学校学力経年調査における「授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいますか。」という質問に対して、最も肯定的な「当てはまる」と回答する児童の割合を44%にする。</p> <p>○小学校学力経年調査における「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」に対して、最も肯定的な「当てはまる」と回答する児童の割合を38%以上にする。</p> <p>○全国体力・運動能力、運動習慣等調査における体力合計点の対全国比を男女ともに前年度より0.1ポイント向上させる。</p> <p>○5年生の全国体力・運動能力調査における反復横とびの平均記録を大阪市平均と同程度にすることを目標とし、全学年でも1学期と3学期に反復横跳びの記録を測定し、1学期より向上した児童の割合を60%以上にする。</p>	B

年度目標の達成に向けた取組内容、取組の進捗状況を測る指標	進捗状況
<p>取組内容①【基本的な方向 4 誰一人取り残さない学力の向上】</p> <p>本年度の研究主題である「『できた!』があふれる教室に～PBSの視点を取り入れた授業づくり～」をめざし、授業研究を行い、研究を進める。また、授業におけるポジティブな行動(例:進んで発言する、話し合いに前向きに関わる、相手の話を肯定的に受け取る等)を支援・促進する。</p>	B
<p>指標</p> <p>小学校学力経年調査における「授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいますか。」という質問に対して、最も肯定的な「当てはまる」と回答する児童の割合を44%にする。</p>	
<p>取組内容②【基本的な方向 4 誰一人取り残さない学力の向上】</p> <p>昨年度までの研究主題「伝え合う活動を通じた、自己やグループの思考力の育成～国語科の指導を通して～」についても継続して取り組み、思考力・判断力・表現力の育成を図る。</p>	B
<p>指標</p> <p>学校アンケートにおいて、「授業では自分の思いや考えを伝えることができていると思いますか」の項目において、最も肯定的な回答を38%以上とする。</p>	
<p>取組内容③【基本的な方向 5 健やかな体の育成】</p> <p>児童の俊敏性を高めるため、体育の授業を中心に、系統的・継続的な運動機会を確保し、反復横跳びに関連する動きへの意識を高める指導を行う。また、運動遊びや学級活動などとも関連づけながら、楽しさや達成感を実感できるような取組を通して、児童の身体活動量の確保と技能の向上を図る。</p>	C
<p>指標</p> <p>反復横とびの記録を1学期と3学期の2回とり、1学期より向上した児童の割合を60%以上にする。</p>	
年度目標の達成状況や取組結果と分析 最終評価	

- ①授業や学級経営の中で、児童の前向きな行動や努力を意識的に認める取組が広がり、安心して学習に参加できる雰囲気づくりが進んだ。肯定的な声かけや、友達同士で認め合う活動、ICTを活用した意見交流などを通して、児童が自分の考えを表現しやすい学習環境が整いつつある。一方で、PBSの視点をどのような場面で、どのように生かすのかについては、学級や授業によって取組の深まりに差が見られた。
- ②各学年で、児童の発言や取組を肯定的に受け止める声かけや活動の工夫を重ねることで、安心して学習に向かう雰囲気づくりが進んだ。ノートやICTを活用した意見交流など、多様な方法で考えを表現する機会が設けられ、主体的に学びに関わろうとする姿が広がった。一方で、自分の考えをもつことはできても、それを相手に伝えたり、他者の考えを踏まえて深めたりする場面については、学年や児童によって差が見られた。今後もこうした取組を継続しつつ、全ての児童が互いの考えを見合い、関わり合いながら学びを深めていけるような学習場面の充実を考えていく必要がある。
- くわえて、学校アンケートにおける「自分の意見を学級の中で伝えたり、発表したりできているか」という設問については、ペアでの意見交流やICTを用いた協働的な学習場面を十分に想起せずに回答した児童も多く、実際の学習の姿と回答結果との間にずれが生じている可能性がある。今後は、児童の実際の学習活動をよりの確に捉えられるよう、質問の内容や聞き方についても検討していく必要がある。
- ③反復横とびを中心とした体力測定を行い、各学年で体を動かす取組を継続することで、運動に親しみながら体力向上を図る意識が広がった。遊びを取り入れた運動や、授業冒頭での基礎的な運動、動画を活用した動きの確認など、児童が意欲的に取り組める工夫が各学年で見られた。一方で、体を動かすことへの意欲や運動量には個人差があり、日常的な運動習慣として十分に定着しているとは言い切れない面もある。今後は、測定結果を意識した取組と日常の活動をより結び付け、全ての児童が継続して体を動かす経験を積めるようにしていくことが求められる。

#### 次年度への改善点

- ①肯定的な声かけや相互承認の取組が一部の活動にとどまらないよう、教科や学年を越えて共通して意識できる視点として共有していく必要もある。また、ICTを活用した意見交流や振り返りなども含め、児童が安心して考えを表現し、互いに認め合える学習環境を継続的に整えていくことが重要である。
- ②発表の機会に加え、全員が全員の考えを見られる環境を意識した意見交流の場を設けるなど、考えを表現し合う工夫をさらに広げていく必要がある。例えば、ICTの共同編集機能を活用して互いの意見を見合ったりコメントを送り合ったりする取組など、学習内容や児童の実態に応じた方法を、どの学年でも取り入れ、考えを深め合う学習を充実させていく。
- ③反復横とびの測定結果を、単なる記録として終わらせるのではなく、児童自身が振り返り、目標をもって運動に取り組めるような活用の仕方を考えていく必要がある。また、動画の活用や動きのポイントを意識した声かけなど、児童が自分の成長を実感できる手立てを整理し、継続的に取り入れていくことが求められる。さらに、授業時間内だけでなく、短時間で取り組める運動や遊びを工夫し、休み時間や日常の学校生活の中でも体を動かす機会を意図的に確保していかなければならない。

(様式例2)

大阪市立小松小学校 令和7年度 運営に関する計画・自己評価 (目標別シート)

評価基準 A: 目標を上回って達成した B: 目標どおりに達成した  
C: 取り組んだが目標を達成できなかった D: ほとんど取り組めず目標も達成できなかった

年度目標	達成状況
<p><b>【最重要目標3 学びを支える教育環境の充実】</b></p> <p>○授業日において、児童の8割以上が学習者用端末を活用した日数が、年間授業日の93%以上にする。[ただし、事務局が定める学校行事等ICT活用が適さない日数を除く]</p> <p>○「学校園における働き方改革推進プラン」に掲げる教員の勤務時間に関する基準Iを満たす教員の割合を前年度(79%)以上にする。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・1か月の時間外勤務時間が45時間を超えないようにすること</li><li>・1年間の時間外勤務時間が360時間を超えないようにすること</li></ul> <p>○学校アンケートにおける「本を読むのは楽しいと思いますか(新聞を含む)」で肯定的な回答をする児童の割合を75%以上にする。</p>	B

年度目標の達成に向けた取組内容、取組の進捗状況を測る指標	進捗状況
<p>取組内容①【基本的な方向6、教育DXの推進】</p> <p>「こころの天気」の活用を習慣化するためのルーティンを決め、児童が自主的に端末を活用するよう、環境整備や時間確保に努める。</p> <hr/> <p>指標</p> <p>学習者用端末 月間活用率表において、児童の8割以上が端末を活用した日数が学期ごと93%以上にする。</p>	B
<p>取組内容②【基本的な方向7、人材の確保・育成としなやかな組織づくり】</p> <p>「学校園における働き方改革推進プラン」に掲げる教員の勤務時間に関する基準Iを満たすために、業務と生活の両立ができるゆとりのある時間を設ける。また、児童と向き合う時間を確保し、教職員が健康かつ活気のある環境をめざす。</p> <hr/> <p>指標</p> <p>ゆとりの日を週1回設定し、18時までには退勤する。</p>	B
<p>取組内容③【基本的な方向8、生涯学習の支援】</p> <p>毎週火水金曜日に朝読書の時間を設けるとともに、図書ボランティアと協力して読書習慣につながるようにする。また、委員会や学級で読書週間など、読書に関する活動を行い、子どもたちが読書に親しむ環境を整備する。</p> <hr/> <p>指標</p> <p>学校アンケートにおける「本を読むのは楽しいと思いますか(新聞を含む)」の項目について、肯定的な回答をする児童の割合を75%以上にする。</p>	B
年度目標の達成状況や取組結果と分析	最終評価

- ① 学習用端末の活用と「心の天気」の運用状況では、学習者用端末の活用は全学年を通じて高い水準で定着している。
- 低学年では教師による毎日の声掛けや掲示によって入力習慣化された。学年によっては端末活用率が約 98%に達しており、日々の授業において端末は不可欠なツールとなっている。
- 「こころの天気」の運用は、児童の微細な変化を察知する有効な手段として機能している。担任が児童の入力内容（雨や雷のマークなど）を確認し、個別に話を聞くことで、児童の変化に気づきやすくなった。また、高学年においても、授業や宿題（ミラシート、ナビマ等）、連絡帳のやり取りなど、多岐にわたる場面で日常的に活用できている。
- ② 教職員の働き方改革の実施結果では、週 1 回程度の「ゆとりの日」設定を通じた勤務時間の改善は意識の向上が見られるものの、学年によって達成状況に差が見られた。
- 管理職からのアナウンスや学年内での声かけにより、週 1 回以上の設定や定時退勤（18 時退勤）が概ね守られた。他には、teams の共有データを活用した打ち合わせによる時間削減が図られた工夫があった。
- 一方、行事が重なることで業務が終わらず「ゆとりの日」を遵守できない実態がある。児童の下校時間や会議設定などの構造的な問題が定時退勤を阻害している。
- ③ 読書活動の推進と児童の変容では、読書ボランティアによる読み聞かせや朝読書の時間が、児童の読書意欲に好影響を与えている。
- 週 3 日の読書関連の時間を設定した結果、学校アンケートの肯定的な回答が 94.6%に達し、目標を大きく上回っている学年もある。また、読み聞かせが本に対して興味・関心を深めるきっかけとなっている。
- 一方、肯定的な回答が目標値の 75%に近づく結果になった学年では、教科の進捗や行事準備などの影響で、読書のための時間を十分に確保することが難しくなっている

#### 次年度への改善点

- ① ICT 活用の定着と自立化として、これまでの端末活用実績を踏まえ、次年度はさらなる「習慣化」と「活用場面の充実」を目指す。低学年においては、教師の補助なしで自ら「こころの天気」を入力できるよう、自立した操作スキルの定着を支援していく。高学年では、特定の教科だけでなく、多様な学習場面で継続的に端末を活用する授業デザインを推進する必要がある。
- ② 業務内容の精選と構造的な働き改革として、勤務時間の短縮には個人の意識改革だけでなく、学校運営の構造的な見直しが不可欠である。具体的には、放課後の業務削減に向けた授業時数や時間割の再検討、短縮授業などの柔軟な対応を検討する。また、学校行事自体の精選を行い、教職員の業務量を削減する。加えて、長期休業前後の児童看護負担（いきいき活動との連携）といった外部組織の調整や退勤時間の前倒しではない「業務内容そのものの改善」を来年度の新たな指標として検討する。
- ③ 読書環境の最適化として、児童の興味・関心に応じた読書活動を維持・向上させるため、時間確保の工夫が求められる。読書ボランティアによる読み聞かせや朝読書の時間は、児童の肯定的な反応が得られているため継続する。
- 一方、教育課程が過密化する高学年においては、行事準備や教科の進捗により、図書時間を 1 時間丸ごと確保することが困難な実態である。今後は、学年の実態に合わせて、いかに親しみながら効果的な読書時間を確保するかが検討課題となる。